

# 高校・大学移行期における友人関係の形成と維持に関する質的比較 — 「制度的な関係保証」と「能動的行動」の関連性に着目して—

22H2027 小野杏佳

## 1. はじめに

### 1-1. 研究テーマ

友人関係は家族や血縁といった固定的な関係とは異なり、個人の意志による「自己選択」を基盤として成り立つ。石田(2021)は、固定的な共同性が自明でなくなった現代において、友人関係が「個人が真に自らを表現し、安心して帰属できる場」としての価値を高めていると論じている。一方で、若者の友人関係はライフステージの移行に伴い、その維持が困難になる側面がある。本田(2021)は国際比較データの分析から、日本の若者は成人し社会に出る過程で、友人の数が大幅に減少していく傾向にあることを指摘している。この事実は、学校という公的な枠組みを離れた後の友人の形成や維持がいかに個人的な負担となるかを浮き彫りにしている。

こうした友人関係の形成・維持の場において、個人は常に拒絶や失敗を恐れる「対人リスク」という心理的障壁に直面している。見知らぬ他者への接触に伴う緊張感や不安は、個人の能動的な行動を抑制する要因となる。本研究では、この友人数減少の背景に、対人リスクを構造的に緩和していた「制度的な枠組み」の喪失があると考え、独自の分析枠組みとして設定する。

ここで重要となるのは「制度的な関係保証」である。これは、特定の空間や時間に身を置くことで、自由な個人の能動的な努力や社交スキルに関わらず、環境が人間関係の形成・維持を構造的に肩代わりする仕組みを指す。高校という場合は、固定座席やクラス制度、部活動といった「枠組み」が、物理的・協働的近接性のみならず、信頼の連鎖を促す社会的ネットワークをも構造的に提供している。本研究では、この支援が失われた際にいかなる困難が生じるのかを、高校から大学への環境移行期に着目して調査する。

### 1-2. 先行研究の検討

友人関係の形成や維持については、これまで多角的な研究がなされてきた。岡田(2008)は、多様な内的欲求や目的が複合的に作用し、これらの動機が友人への働きかけや自己開示といった具体的な行動に結びつくモデルを構築した。また、浅野(2022)は、現代の大学生が場面や相手に応じて「自分を使い分ける」という多元的な自己を持ち、趣味を介した「趣味縁」的なつながりを広げているといった、流動的な人間関係に適応している実態を明らかにした。

これらの研究は、個人の動機や自己のあり方がいかに関係構築に寄与するかを詳述している。しかし、良好な関係形成がなされるかどうかは個人の資質や意識のみに依存するものではなく、その個人が置かれた環境構造の影響を無視することはできない。つまり、個人の内

的側面に着目するだけでなく、それらを取り巻く外部的な環境がいかなる影響を及ぼしているのかを検討する視点も不可欠である。

環境の影響については、中嶋ら（2018）が大学生を対象とした実証研究を行っている。同じ講義を履修するという近接性が出会い（弱い紐帯）には寄与するものの、深い紐帯（強い紐帯）を築くには不十分であり、グループワーク等の質の高い相互作用が必要であることを明らかにした。しかし、その相互作用の内部でどのようなやり取りや個人の行動が促され、信頼や互惠性が形成されていくのかという詳細なメカニズムまでは明らかにされていない。

本研究は、これらの知見を踏まえ、高校の「固定性」と大学の「流動性」という環境構造の差異が、個人の能動的な適応行動にいかなる変容を迫るのかを、質的なアプローチによって解明しようとするものである。

### 1-3. 研究目的

友人関係の構築は、どのような環境（場所）で形成されるかに強く規定される。本研究は、高校と大学における「制度的な枠組み」の差異、とりわけ高校において機能していた「制度的な関係保証」の有無に着目する。

高校という、物理的・協働的・近接性が多層的に保証されている環境から、それらが個人の能動性に委ねられる大学環境へと移行する際、学生が直面する具体的な困難とはいかなるものか。そして、その困難を乗り越えるために、学生が近接性や社会的ネットワークといった環境要素を前にして、どのような行動をとっているのかを明らかにすることを目的とする。本研究では、単なる個人の社交スキルの問題ではなく、環境の機能変化に伴う「関係形成の能動化」のプロセスを検討する。

## 2. 研究方法

本研究のおもな調査方法は、半構造化インタビューによる聞き取り調査である。高校時代の固定的な環境を経験し、現在は大学生活を送っている筆者と同年代の大学生5名を対象とした。調査は、1人あたり約1時間の聞き取りを行った。表2-1は本研究におけるインタビュー対象者のプロフィールである。学部・学科・コースやその人数規模は、個人の対人リスクの感じ方や、利用可能なリソース（既存のネットワーク等）を左右すると考え、多様な属性を持つ学生を選定した。

表2-1 調査対象者一覧

仮名	性別	出身高校	学年	所属学部・学科・コース	人数規模
山下さん	男性	A高校	2年	理工学部〇〇学科	学科の人数は約30名
後藤さん	女性	B高校	3年	人文社会科学部〇〇課程	課程の人数は約70名
佐倉さん	女性	B高校	4年	人文社会科学部××課程	課程の人数は約100名
北山さん	女性	B高校	4年	教育学部〇〇学科〇〇コース	コースの人数は約5~10名
平沢さん	女性	B高校	4年	人文社会科学部××課程	課程の人数は約100名

### 3. 高校環境における友人関係形成と維持の構造

本章では、高校という環境が提供する「制度的な関係保証」の構造について、物理的・協働的近接性、および社会的ネットワークの観点から実証的に検討する。インタビュー調査から得られた具体的なエピソードを通じ、環境がいかに個人の能動的な努力や対人リスクを肩代わりし、友人関係の形成と維持を支えているのかを明らかにする。

#### 3-1. 物理的近接性による関係形成の支援

事例 3-1：佐倉さんは入学当初、人見知りで知人もいないため、孤独感があった。だが、隣の席に座っていた女子が「一緒にご飯食べよう」と声をかけ、昼食をともにすることになった。その女子生徒は座席の近い他の生徒にも声をかけていたため、昼食の場で他の生徒とも話すことができた。

佐倉さんは「人見知りで孤独感があった」と語るように、自ら関係を切り開く行動を取れていなかった。しかし、「隣の席」という物理的近接性が、他者からのアプローチ（「一緒にご飯を食べよう」）を誘発し、受動的に関係形成の機会を獲得している。座席が近いという事実は、他者にとっても話しかける正当な理由となり、結果として個人の対人スキルに依存しない形で機能していたことが分かる。

これは、高校の物理的近接性は、個人の内面的な動機や主体性に依存することなく、相互作用の機会を受動的・半自動的に発生させる「環境の制度的な力」として機能し、関係形成を強力に保証していたことを示している。

#### 3-2. 協働的近接性と共通の困難による関係の維持

事例 3-2：山下さんは、部活動で当時副キャプテンを務めていた。顧問は非常に厳しい指導者であり、キャプテンと対立することが多く、キャプテンが精神的に追い詰められる時期が長期間続いた。部員は、顧問の先生を「敵」と認識し、団結して辛い指導を乗り越えたことで、部員同士の絆はより一層深まったと感じている。同期の部員は3年間一度もケンカをしたことがなかった。

山下さんの事例は、「顧問」という外部からの圧力により、集団内部の結束力を高めたことを示している。「敵」の存在や過酷な指導という共通の困難は、部員たちに「団結せざるを得ない」状況をもたらした。この経験は、個々の性格の不一致などを乗り越えて、「3年間一度もケンカをしない」ほどの高い関係の質と安定性を構造的に保証したといえる。

これは、部活動という協働的近接性の場において、環境が与える試練が個人の能動的な関係維持の努力を肩代わりしていたことを示している。高校の環境が、時間を共有させるとともに、「困難」という装置を通じて感情的な紐帯までも生成し、関係の質的深化を強力に支えていたことが明らかになった。

### 3-3. 社会的ネットワークと共通属性による信頼の連鎖

事例 3-3：部活動を入部後、北山さんは同期の女子生徒、村上さんと会話したところ、村上さんが通っていた中学に北山さんの幼馴染の友人がいたことが判明した。この共通の知人の存在に驚きと喜びを感じ、会話が盛り上がったことで、村上さんとはすぐに打ち解けることができた。

北山さんの事例において、共通の知人の発見は、単なる事実確認を超えて、「驚きと喜び」というポジティブな感情を喚起している。この「共通の知人」というネットワークの接点は、相手に対する未知の不安を払拭し、信頼性を担保する心理的な保証として機能した。その結果、会話が自動的に盛り上がり、関係構築のプロセスが大幅に短縮されている。これは、ネットワークが円滑な相互作用を促し、関係形成を間接的に支援した例である。

これは、社会的ネットワークが、個人の能動的な働きかけや新しい集団への参入時に不安を軽減し、相互作用を円滑化する「心理的な保証」を提供することで、関係形成を間接的に支援していたことを示している。

### 3-4. まとめ

高校における友人関係の形成・維持のプロセスを事例から検討した結果、以下の実態が明らかとなった。まず物理的近接性については、佐倉さんの事例のように、固定座席という仕組みが話しかける正当な理由を自動的に供給し、個人の社交スキルに関わらず受動的な関係形成を可能にしていた。協働的近接性では、山下さんの事例に見られた「共通の困難」が結束力を高める装置として機能し、強固な安定性を構造的に保証していた。また社会的ネットワークにおいても、北山さんの事例のように共通の知人の存在が信頼の保証となり、急速に関係性を発展させた。以上の分析から、高校環境の本質は、固定性が多層的に作用することで、「関係の維持に過度な労力を要しない人間関係」が保証されていた点にある。

## 4. 大学環境における友人関係形成と維持の変容

本章では、高校で機能していた制度的保証が相対的に小さくなる大学環境において、学生が環境の諸要素を前にしてどのような行動をとっているのかを、事例から検討する。流動的な環境のなかで学生がいかに接触機会を創出し、関係を繋ぎ止めていたのか、その実態を明らかにする。

### 4-1. 物理的近接性の資源化と関係形成の契機の創出

事例 4-1：後藤さんは最初の入学説明会の時に、たまたま隣になった女子に「これって決まった席順があるのかな」、とか「すみません、シャーペン貸してくれませんか」といった風に話しかけ、その流れで「私〇〇からきて、何学部で」というように話しかけた。そのようなことを3人にし、そのうちの1人と「気が合いそうだ」と感じ、学食を食べに行ったりした。

後藤さんの事例は、入学説明会という場で「たまたま隣になった」という偶発的な物理的近接性を、関係形成の契機として逃さず活用した事例である。重要な点は、「シャーペンを貸していませんか」といった具体的な「口実」を意図的に創出することで、話しかける際の心理的ハードルを自ら低減させている点にある。

大学の流動的な環境においては、物理的近接性が自動的な関係形成を保証しない。その代わりに、学生が「偶発的な隣席の利用」といった形で、物理的近接性を能動的に「捕捉・創出」する行動が、関係形成の初動を決定づけていることが明らかになった。高校では「席が隣だから自然に話す」ことが保証されていたが、大学では一時的な近接性を関係形成へと繋げるために、具体的な「口実」といった個人の工夫が不可欠となっていることが分かる。

#### 4-2. 協働的近接性の能動的創出と関係の深化

事例 4-2：佐倉さんは大学2年生の実習で、遠征調査があった。この遠征調査で宿泊するとき、泊まる部屋が同じになったメンバーは計6人であった。2人は高校時代から仲の良い友達で、4人は顔見知り程度の関係だった。だが、泊まる部屋が同じになったことで、この4人とは遠征調査中に仲が深まった。今（本研究の調査時）でも、大学で話す機会も多く、ともに遊びに出かけることもある。

佐倉さんの事例における「遠征調査での宿泊」は、一時的ではあるが極めて強力な協働的近接性（生活空間の共有）が発生する場である。重要なのは、この実習を自ら選択した結果として、普段の希薄な関係性を超えた「私的な領域」での相互作用が強制され、それが「仲が深まった」という主観的な関係性の変容をもたらした点である。

大学では、高校に比べ制度的に用意されている協働的な場は少ない。そのため、佐倉さんのように、集中的な相互作用が発生する実習やグループワークなどの場を、自律的な目的を持って自ら選択し、飛び込む必要がある。共通の課題に向かって能動的に労力を投下するプロセスが、希薄だった関係を親密なものへと変容させていることが明らかとなった。

#### 4-3. 社会的ネットワークの戦略的活用と信頼の外部保証

事例 4-3：平沢さんは、授業内のグループワークで仲良くなった友人の真城さんを介して、高木さんという人と顔見知りになった。終電の時間が過ぎ、帰る手段を失ったとき、真城さんが高木さんを紹介してくれ、高木さんがほぼ初対面にもかかわらず泊まらせてくれた。このことがあってから、高木さんと仲良くなり、3人で遊ぶ機会が増えた。

平沢さんの事例における「初対面での宿泊」という対人リスクを伴うこの行動が成立した背景には、友人の真城さんが信頼の保証人として機能したからである。既存のネットワーク（真城さん）を仲介させることで、未知の他者（高木さん）に対する警戒心を低減させ、急速な関係構築（ネットワークの拡張）に成功している。

高校のような「自動的な信頼の連鎖」が起きない大学環境下では、学生は紹介者を介するなどの方法で、信頼の保証を自ら獲得する必要がある。この事例は、ネットワークの拡張が

個人の判断や既存リソースの能動的な活用に依存している実態を示している。信頼が外部から自動的に保証されない流動的な環境において、学生が自ら他者との接点を見出し、対人リスクを管理しながら関係を構築しようとするプロセスが確認された。

#### 4-4. まとめ

大学における友人関係の形成・維持のプロセスを事例から検討した結果、以下の実態が明らかとなった。まず物理的近接性については、単に居合わせるだけでは会話が始まらず、後藤さんの事例のように具体的な口実を自ら用意して働きかける行動が見られた。協働的近接性では、高校のような自動的な再会が期待できないため、履修を合わせるなどの能動的な行動や、特定の調査実習を自発的に選択して接触機会を確保する方法がとられていた。また社会的ネットワークにおいても、紹介者を介在させることで既存の繋がりを信頼の保証として活用する実態が確認された。以上の事例から、大学環境では、学生が自身の置かれた状況や資源を能動的に利用し、働きかけを継続することで関係を成立させている実態が明らかとなった。

### 5. 考察

#### 5-1. 本研究の結論：「環境の資源化」への能動的適応

本研究の結論は、制度的環境の変化が友人関係の成立要件を「構造的代替」から「環境の資源化」へと根本的に転換させる、という点に集約される。高校から大学への移行は、関係維持を環境が負担してくれる状態から、個人が環境を「資源」として使いこなし、能動的に行動する必要がある状態への適応プロセスである。大学における近接性は、高校時代のような強制力を持った保証ではなく、あくまで働きかけの「きっかけ」に過ぎない。したがって、大学生の困難の本質は、個人の社交スキルの欠如というより、この環境の機能変化を認識し、受動的な態度から能動的な活用へと行動様式を切り替えることへの不適応にあると言える。

#### 5-2. 制度的な関係保証の両義性

高校の「制度的な関係保証」は、友人形成を強力に支援する一方で、「逃げ場のない固定性」という抑圧を個人に課している。第3章で見た「共通の困難」による結束も、個人の内面では嫌いな相手とも団結せざるを得ない同調圧力として経験される側面があり、高校生の悩みは友人ができないことよりも、むしろ環境の固定性に起因する摩擦や抑圧といった質的な問題に根ざしている。

#### 5-3. 選択の自由の影：適応の成否と孤立の構造

大学の環境が提供する「選択の自由」は、同時に「能動的に選択しないことによる孤立」を正当化するリスクを孕んでいる。初期資源（旧友の有無）を欠き、一時的な近接性を関係へと転換する口実を能動的に創出できない学生は、自由な環境下で容易に孤立へと陥る。本

研究で見られた適応事例は、高度な環境活用能力を発揮した結果であり、その陰には、能力の行使に失敗、あるいは心理的負担を感じて断念した学生たちが構造的に取り残されるリスクが潜んでいる。

#### 5-4. 本研究の学術的意義

本研究の学術的意義は、大学における「ぼっち（孤立）」や不適応の問題を、単なる個人のコミュニケーション能力の不足として片付けるのではなく、「環境資源の活用不全」という構造的な視点から捉え直した点にある。この点において、本研究は学生支援の実践に対しても重要な示唆を含んでいるといえる。環境がいかに関係性を規定し、個人がいかに関係性を乗り越えていくのかというテーマは、流動化する現代社会における人間関係のあり方を考える上で、今後も探求すべき重要な課題である。

#### 参考文献

- 浅野智彦[2022]「大学生における自己の多元化とその規定要因」、『東京学芸大学紀要.人文社会科学系.Ⅱ』、第73集、pp.119-133
- 石田光規 [2021]『友人の社会史』、晃洋書房
- E.ゴッフマン(著)、佐藤 毅(翻訳) [1985]『出会い—相互行為の社会学』、誠信書房
- 岡田涼 [2008]「親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築」、『教育心理学』、第56号、pp.575-588
- 木田勇輔[2020]「若年のソーシャルメディア利用とつながりの形成—Instagramはオフラインの人間関係と結びつくか?—」、『椋山女学園大学文化情報学部紀要』第20巻、pp.53-67
- 河井大介[2014]「ソーシャルメディア・パラドクス—ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか」、『社会情報学』第3巻、第1号、pp31-46
- 河井亨 [2018]「大学生の学習とアイデンティティはどのような関係にあるのか —学習とアイデンティティ形成の3対モデルの縫合—」、『京都大学高等教育研究』、第24号 pp.67-77
- 中嶋学、高場理人、和田葵 [2018]「大学生のネットワーク形成—近接性の影響の検討—」、『同志社政策科学院生論集』、第7号、pp.37-48
- 本田由紀[2021]『「日本」ってどんな国?—国際比較データで社会が見えてくる—』、ちくまプリマー新書